

一九八〇年代の『宝島』における反原発言説の展開

久野 桜 希 子

一、問題設定

チエルノブイリ原発事故から二年後、一九八八年から「反原発ニューウエーブ」と呼ばれる運動が盛んになる^①。その中心的な層は都市部の主婦であったが、若者にも運動は広がりを見せていた^②。原発問題に関心を持つ若者の主要なメディアとして機能していたのが当時の『宝島』である。

『宝島』において、音楽を中心にサブカルチャーと接続して反原発のメッセージが発信され、「反原発のサブカル化」がなされていたことは、すでに先行論の中で指摘されている。桂秀実『反原発の思想史——冷戦からフクシマへ』（筑摩書房、二〇一二年）は、『宝島』本誌や別冊宝島シリーズ等、JICC出版局から展開される「宝島文化」を一九八〇年代の反原発運動の重要な要素として位置付ける。また、山本昭宏「一九八〇年代の雑誌『宝島』と核の「語

り易さ」(『原爆文学研究』第一二号、二〇一二年)は『宝島』における反原発の語り方について、ライフスタイルとの接続と口語調の語りという二点の特徴を挙げ、反原発運動を音楽やライフスタイルと結びつけた「格好良い」ものとして価値付けることにより、読者にとつて原発や核がポピュラーカルチャーと同様に「語り易い」ものとなったと指摘している。このように、先行研究では『宝島』及び「宝島文化」のみが反原発に関心を持つ若者の代表的なメディアとして位置付けられ、分析対象となってきた。

しかし、この時期、原発問題を継続的に取り上げていた若者雑誌は『宝島』だけではなかった。本稿は、一九八〇年代の他の若者雑誌における反原発言説と比較することで、『宝島』が同時代の若者による反原発運動に果たした役割を明らかにすることを目的とする。ロック雑誌としての共通性を持つ『ミュージック・マガジン』、同時代に「宝島文化」とは別の文化を築いていたおたくの情報共有

の場である『コミックボックス』の反原発言説を比較対象とする。これらの雑誌と『宝島』では、原発問題の語り方や読者の反応においてどのような点が異なっていたのかに着目して分析することにより、同時代の文脈の中で『宝島』の反原発言説が果たした役割を考察する。

二、一九八〇年代の『宝島』と読者

『宝島』は一九七三年八月に、ワンダーランド社が発行し晶文社が発売する形で『ワンダーランド』として創刊されたが、商標登録の問題により三号から誌名を『宝島』に改めた。その後、一九七四年からはJICC出版局（現・宝島社）に引き継がれる⁵³。二〇一五年に休刊するまで、約十年ごとにテーマも読者層も大幅に路線変更していった⁵⁴。一九八〇年代の『宝島』は、一九八〇年八月号から一九九〇年三月九日号までの関川誠編集長時代と区分することができ、筆者はこの時期の『宝島』を「ニューウェーブ文化圏最大の情報発信メディア」であつたと位置付けている。

若者文化研究において、「ニューウェーブ文化」という明確な定義が存在しているわけではないが、一九七〇年代末から一九八〇年代前半にかけて隆盛したロック・ミュージックの一形態としてのニューウェーブを基礎としており、その考え方が同時期の雑誌、漫画などの新しい動きと連動し、文化にまで拡大したものと捉えている。ニューウェーブはひとつの様式を指すのではなく、従来の形式と異なる実験性や強い個性を追求する姿勢を指す言葉であつた。「他人とは違う変わった私」「周囲には分からない価値が分かる私」がこ

の文化圏の若者のアイデンティティだといえる。そのため、『宝島』は同世代向けの他誌にはない独自の情報の発信を信条とし、編集部も読者もメジャーな若者文化への対抗意識を強く持っていた⁵⁵。そこには、同世代文化の中の「カウンターカルチャー」意識が共有されていたといえる。

一九八〇年代後半の『宝島』の特徴として注目したいのは、日本のロック・シーンの中で、雑誌というメディアに捉われない展開を見せた点である。篠原章は、この時期の『宝島』が「無数のバンドが出現しつづつあつたバンク・ニューウェイヴ・シーンを「ストーリー・シーン」として構築し、表現の場として準備すること」に取り組んでいたと指摘している⁵⁶。一九八五年にインディーズレーベル「キャプテン・レコード」を設立し、バンク・ニューウェイヴのインディーズバンドのCDやレコードのリリースをするようになったことは、その象徴であろう。一九八八年には『宝島』での特集を独立させる形で、バンド結成のノウハウや情報共有に特化した雑誌『バンドやろうぜ!!』を創刊する。読者が主体的に音楽に関わる方法を提供することにより、一九八〇年代末のバンドブームを支えていくのである⁵⁷。このように、誌面から音楽の情報を届けるだけでなく、読者が音楽を聴いたり演奏したりする「場」を創出したことは、この時期の『宝島』という雑誌の大きな特異性であつたといえるだろう。

当時、『宝島』読者の少年少女らは、どのようなイメージで語られていたのだろうか。若者のトレンドを分析していたパルコのマーケティング情報誌『アクロス』の一九八六年四月号の記事「新若者風俗分類学 ポスト・タコソボ論」では、雑誌名やファッションブラ

ンドによって若者を九種の集団に分類している。そのうちのひとつに「宝島」と名付けられた集団がある。雑誌名によって類型化されるほど「宝島」が一定の若者に読まれていたのであり、そのファッションや趣味がひとつのスタイルとして観察されている。ここで描写される「宝島」スタイルとは、「ロック、ファッション&ストリート情報マガジンと銘打つ情報誌『宝島』がリーダー」であり、「全国に散らばる、ちよつと変つてゐる志向」の、でも普段は普通の子してる少年少女達、「お金はないけどファッションには興味大」、「好きな音楽は日本のインディーズ・レーベル。戸川純などはあまりにメジャー化しすぎて不満」、「コンサートに行つてノリまくるのが最高の幸せ」^⑧といったものである。『宝島』読者の少年少女らは、音楽とファッションに強い興味を持ち、個性や創造性が強く、主流の動きから逸脱するような若者として描かれている。

三、『宝島』における反原発言説

一九八八年の「反原発ニューウエーブ」の盛り上がり以前の『宝島』では、原発関連の記事は、反核フェスや海外の運動の紹介に留まつている^⑨。一九八六年四月のチェルノブイリ原発事故についても言及することはなく、広瀬隆「危険な話」（八月書館、一九八七年）の刊行と反原発ロックの隆盛により、原発問題に関心を持つ流れができ始める。一九八八年六月号では、七頁にわたる最大規模の特集「ATOMIC CRISIS」が組まれている。この特集は、原発の危険性を地図や漫画を用いて視覚的に解説したり、反原発に関する映画や音楽、各地での運動等を紹介したりする内容となっている。こ

の他の号でも原発問題は継続的に取り上げられており、単発の記事のほか、影山民夫や後述するいとうせいこうの原発問題を中心的な話題とする連載もある。また、毎号、読者投稿欄では冒頭に反原発に関する投稿が複数掲載されており、編集部にとつて議論を活性化させたい重要なテーマであったことが分かる。

『宝島』及び読者である若者は「反原発ニューウエーブ」の直接行動にどのように連なつていたのだろうか。『宝島』読者が運動に参加する様子は『アクロス』一九八八年六月号の特集記事「いま、なぜ『反原発』なのか」の中で詳細に記録されている。この記事では、一九八八年四月二三、二四日に日比谷公園で開催された「原発とめよう一万人行動」に出現した「宝島スタイル」の若者について、驚きをもつて描写している。

そこに集まるのは「反原発運動」というイメージとはまったくかけ離れた宝島ファッションのティーンズ達。帽子に厚底靴、黒いレザーコート、脱色して逆立てた髪、あるいはモヒカン。

その彼らも「原発いらない」「No Nukes」などといったステッカーを貼つていたりする。普段は暗闇の中、「屋根裏」などのライブハウスでしかお目にかからない彼らが、太陽の光がサンサンとふりそそぐ真昼間の公園という、やたら健康な場所で、興奮・タテノリ状況になつてゐるのはなかなか異様だ。（中略）このバンクキッズ達はメガホンを回しながら各々勝手なことを叫びたてる。初めは慣れないデモ行進に緊張気味で硬い表情をしていたが、次第にギターに合わせてカゲキなバンクノリの歌を歌つたりして、元気を取り戻して行進を続ける。^⑩

ここでは、「反原発ニューウェーブ」の運動に連なりながら、独自の「宝島スタイル」でメッセージを主張する若者たちの姿が捉えられている。しかし、この日の盛り上がりは『宝島』においては、簡潔に書かれるに留まる。

4月23・24日には東京の日比谷公園で「原発とめよう一万人行動」が開かれ、成功のうちに終わった。マスコミに『広瀬隆現象』とまで言われたこの反原発への盛り上がり。(中略)運動に参加するしないはともかく周りは確実に動いている事だけは知っておいて欲しい。⁽¹⁾

このほか、言及は「4/24の日比谷は、反原発運動最大のお祭りといった感じ。公園の一角では、ラウド・マシーンらのフリー・ギグも開かれ」⁽²⁾ たという部分のみであり、『宝島』で人気のミュージシャンのコンサートも開催されたことが紹介されるものの、「宝島ファクション」の若者がデモ行進にも参加したことは触れられない。「原発とめよう一万人行動」は、主婦らと『宝島』周辺の若者が連帯した最大で唯一の直接行動であったと思われる⁽³⁾、以降、直接行動に連なる様子は見られなくなる。並行して『宝島』で拡大していくのは、いとうせいこうが始めた「自宅闘争」という手段である。

四、反原発の実践——「自宅闘争」

いとうせいこうは、芸人、俳優、ラッパー、ライター等、非常に

幅広い活動をしており、一九八八年当時は小説『ローライフキング』の刊行で話題を集め、作家としても注目されていた。いとうは『宝島』一九八八年四月号より、自宅から個人的に反原発運動を展開する「自宅闘争者の日記」と題した連載を始める。「自宅闘争」とは「八〇年代の闘争の方向のこと」であり「八〇年代の闘争は、労働歌うたつて大騒ぎではない」⁽⁴⁾と考えを述べている。また「私はこうするという連載である。君がそうするかは、私は知らない。私がこうすることしか、私は書けない」⁽⁵⁾というように、読者に参加を呼びかける意図はなく、あくまで個人的な反原発運動の記録であるとしている。具体的な方法として「原発はいらない」と書いた不幸の手紙をまわす、電力会社がスポンサーとなっているテレビ番組を視聴しない等を挙げている⁽⁶⁾。「自宅闘争」とは、デモに参加せず、仲間が集まって行動することさえない、文字通りの「自宅」で自分の身近なことから反原発のメッセージを主張することであった。

いとうの「自宅闘争」は、ページの片隅での連載を超えて『宝島』全体の実践法として浸透していく。一九八八年一月号の「反原発 EXPRESS」では「自宅できかない人なら、自宅でやればいい」として「電気料金を自動から直接支払いに切り換えて論争していくとか、家庭内の電力消費を抑える」⁽⁷⁾という方法が提案されている。

『宝島』において連帯しない行動の方法が提案されていく背景には、「群れること」への拒否感がある。「反原発ミュージシャン」の一人として登場するラフィン・ノーブズのチャーミー(小山ユウ)は、『宝島』のインタビュウの中で次のように述べている。

反戦、反核つて、オレ、何かつるみ出した時点でイヤだね。みにくくて。確かに世間一般的にはいい方向に進み出したつていうけど、これ、社会的モラルを一切無視しての発言よ。ヤダね。つるみ出した瞬間を考えると。それこそ、いとうせいこうの言うところの「自宅闘争」みたいなやり方の方がすばらしいと言うか、判らへんけど、ああするしかないちゃうかって気がする。仲間意識をもち出したらそれはもう運動になるし、運動になるつて事は、自分は自由になつてつるみもりが、どんどん自分をしめつける事に結果的になるから。⁽¹⁸⁾

いとうの「自宅闘争」の方法に賛同するとともに、連帯することへの拒否感や「運動」に感じる不自由さを率直に語っている。こうした拒否反応は、いとうも示している。「自宅闘争」という手段に至る背景について「運動はダサイ。効果もない。だけど腹が立つ事がある。そんなジレンマの中で、ようやく私は、人にすすめてはならない個人的闘争」という活路を見出した⁽¹⁹⁾と述べている。

一九八〇年代に盛り上がりを見せた「反原発ニューウェーブ」の運動は、個人の意志で参加することを重視していた。この点が従来の組織的な運動とは大きく異なつており、一般に広がっていく要因となった。しかし集団を忌避し、中心の動きとは距離を取りたいニューウェーブ文化の若者にとつては、個人の集まりであつたとしても、デモというスタイルそのものが「ダサイ」と感じられ、受け入れ難いものであつた。そこには、「運動」や「連帯」への拒否反応が明確に表れている。

こうした『宝島』の「自宅闘争」に対して、読者もさまざまな方法を実践することで応じている。読者投稿では、デモ等の直接行動に参加した報告は見当たらず「私達が私達なりにできることつて、とりあえず人と話をするところからかな、と思つている」⁽²⁰⁾というように、家族や友人と原発問題について話すといった身近な行動の報告が複数見られる。『宝島』への投稿自体も、読者にとつては「自宅闘争」の実践のひとつであつたといえるだろう。ほかに、出版元に送られてきた『危険な話』の読書カードや反原発のメッセージを書いて送る企画「一枚のハガキが原発を止める」に寄せられたハガキも、一〇代からのものが多かつたという⁽²¹⁾。読書カードやハガキを送ることもまた、「自宅闘争」的な手段である。

このように、「自宅闘争」は『宝島』に登場する他のミュージシャンや読者の間にも広がりを見せている。「自宅闘争」の考え方は、屋外の広い空間で集合し、共通のメッセージを唱えるような、デモへの強い拒否感から出発している。直接行動ではない方法で反原発を訴えようとするとき、自宅という最も個人的な場所から、自分のやりたい方法で行動し、誰からも強制や指示を受けることのない「自宅闘争」は、実践しやすく受け入れやすかつたということであろう。このような方法でなければ、『宝島』において読者の実践にまで反原発思想が広がることはなかつたのではないだろうか。

五、反原発の実践——趣味との接続

完全な個人行動である「自宅闘争」に加えて、『宝島』ではポピュラーカルチャーと結びつけることで反原発のメッセージを仲間内



〈図1〉読者プレゼントのステッカーとバッジ（『宝島』1988年10月、210頁）

で発信・共有する手段も見られた。「反原発のメッセージを伝える記事のなかに、ポピュラー音楽のアイコンを挿入するという戦略が徹底されていた」⁽²²⁾と山本昭宏が指摘しているように、特に音楽に関連付けた語りは数多い。反原発をタイトルに掲げた特集記事で、音楽と結び付けられるだけでなく、ミュージシャンのインタビューや連載で原発問題が話題になることもあった⁽²³⁾。

音楽のほかに、本節で注目したいのがファッションである。『宝島』では反原発のマークやメッセージをデザインした服、小物を身につけることも提案されている。「自身やトレーナーなどにメッセージを託すという行為」は「言葉にするには言いにくい原子力反対というメッセージを発するの、細やかな武器となるもの」⁽²⁴⁾であるといい、メッセージTシャツ等の服を紹介している。

しかし『宝島』で

のファッションと結びつけた反原発の実践は、既存の商品の紹介に留まらない。創刊一五周年記念として反戦や反原発のマークをデザインしたオリジナルTシャツを製作し、「君の主張をメッセージTシャツで胸にかかげろ！」⁽²⁵⁾と呼びかけ、通信販売を行なっている。同様に、図1のように「宝島デザイン」のステッカーやバッジも製作し、読者プレゼントにしている⁽²⁶⁾。また八月には、一五周年記念のロックフェスティバルを開催し、二日間で二万人を動員しているが、会場のレポートでは「反原発のミニコミを配る集団もいたし、さまざまメッセージTシャツも見かけた」⁽²⁷⁾という。読者は反核フェスやイベントに行くだけでなく、メッセージTシャツやバッジを身につけて参加することで、原発問題と音楽とファッションを結びつけた方法を実践していたのである。『宝島』はこうした方法を提案し呼びかけるだけでなく、オリジナルデザインのTシャツやバッジ等を製作・販売し、ロックイベントを開催するという雑誌メディアに捉われない展開を見せている。

このような雑誌メディアを超えた展開をしていく姿勢は、前述した一九八五年の「キャプテン・レコード」の設立に象徴されるように、この時期の『宝島』の特徴である。『宝島』は、ロックシーンの構築と同様、反原発のメッセージを発信する場を作り出すことにも意欲的であったといえよう。「ロックと反原発」を結びつけた場の創出は『宝島』という雑誌だからこそ可能であった。

六、『ミュージック・マガジン』の反原発記事との比較

同時期、『宝島』以外の若者雑誌で、反原発はどのように語られ

ていたのだろうか。『宝島』と同様、反原発に関する記事を継続的に掲載していた若者雑誌として『ミュージック・マガジン』が挙げられる。ともにロック雑誌であり、反原発のメッセージは共通するものの、両誌の語り方は異なるものとなっている。『ミュージック・マガジン』と比較することにより、『宝島』の反原発記事の特性を考えてみたい。

『ミュージック・マガジン』は『ニューミュージック・マガジン』として一九六九年四月に中村とうようによって創刊された。一九八〇年より誌名を『ミュージック・マガジン』と改める。創刊から一九八九年まで編集長を務めた中村は、ロック好きの若者の間でカリスマ視されていた。篠原章は、日本にロックが根付いていく一九七〇年代の文化状況の中で「たんにアーティストに関する情報を提供する場ではなく、ニッポン人がロックを聴き、ロックを創り、ロックを演奏する際に必要な情報を総合的に提供したという意味で、日本のロックジャーナリズムのパイオニアというにふさわしい雑誌」⁸²であると『ミュージック・マガジン』を評価している。

当時『宝島』の編集長を務めていた関川誠は、『ミュージック・マガジン』の創刊号からの読者であったという。そして、『宝島』をニューウェーブ路線に大幅変更する際の編集方針として「批評はしないというのが前提」であったといい、『ミュージック・マガジン』や『ロッキング・オン』は批評誌だつたけれど、われわれはもつとミィハーでいたいというか、批評という行為は意味がないんじゃないかなと思つてましたから。面白いものを面白くとりあげようと」考えていたと語っている⁸³。『ミュージック・マガジン』の批評的な姿勢を意識しており、それとは異なる雑誌を作ろうとしていたことが分か

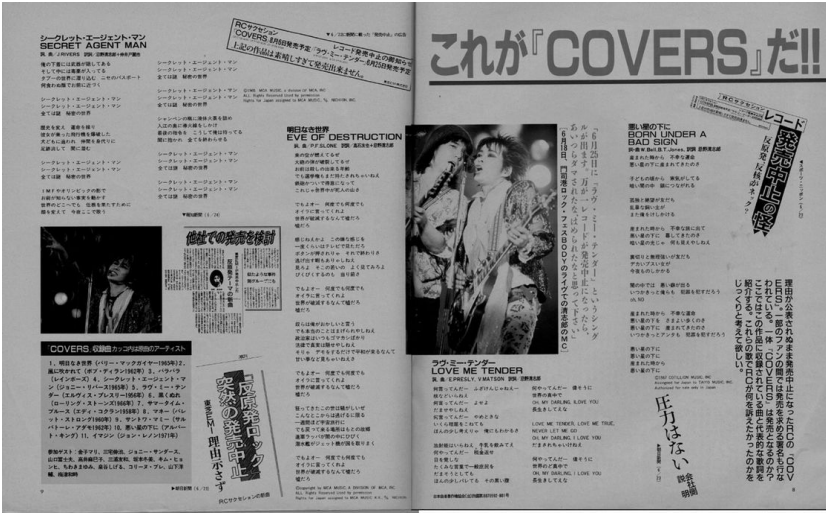
る。

純粋なロック批評誌として機能していた『ミュージック・マガジン』と「ミィハー的好奇心」を編集方針としていた『宝島』では、原発問題の語り方は大きく異なつていた。

一九八〇年代後半の『ミュージック・マガジン』における反原発記事の特徴として、取り上げる時期の早さが挙げられる。一九八八年以前では、記事数は少ないものの、一九八五年一月号においてすでに六頁にわたる特集「原子力発電所は日本人の飽食の象徴だ」を掲載しており、チエルノブイリ原発事故以前から原発問題を真剣に取り上げている。また、事故直後の一九八六年七月号においても特集「すべての原発をただちにとめる！ ソ連原発事故は私たちの問題」を載せている。前述のように『宝島』では、同年に事故に関する記事はないため、『ミュージック・マガジン』の方がいち早く反応したといえる。

『宝島』と『ミュージック・マガジン』における反原発の語り方の違いは「RC事件」時の誌面によく現れている。「RC事件」とは、一九八八年六月、RCサクセションのLP「COVERS」とシングル「ラヴ・ミー・テンダー」の発売が突然中止されたことを指す。中止の理由は明かされなかったが、発売元の東芝EMIが原発産業大手の東芝の出資企業であったため、反原発を主張する歌詞が社内問題になったのではないかとされた。RCサクセションは、この時期の『宝島』のアイコンであり、この事件を契機に『宝島』ではさらに原発問題が盛り上がっていくことになる。『ミュージック・マガジン』においても「RC事件」は、各回六頁にわたる全八回の連載「シリーズ」原発問題とその周辺⁸⁴」を開始するきっかけになっている。原

発問題が音楽に直接的に影響を及ぼした「RC事件」を両誌がどのように取り上げたのかを見ていく。



〈図2〉「RC事件」を取り上げる『宝島』の記事（『宝島』1988年8月、8-9頁）

『宝島』一九八八年八月号では、表紙に「忌野清志郎『COVERS』発売中止を語る」と大々的に書かれ、作詞した忌野清志郎へのインタビュー記事が冒頭に配置されている。このインタビューは元々、発売予定であったLPとシングルについて話を聞く予定であり、インタビュー当日も編集部はそのつもりであったのが、忌野本人の口から発売中止を聞かされ、急遽内容が変更になったのだという⁽³⁰⁾。「このインタビューは清志郎が宝島読者にだけ語ってくれた『発売中止』についての本音」としており、事件について当時、忌野本人は多くを語らなかつたため、貴重なインタビューとなった。

そのほか、発売中止となった歌の歌詞や新聞記事をコラーージュした頁で構成されている(図2)。このように『宝島』では、ミュージシャン本人に直撃したインタビューとビジュアルな誌面で構成しており、批評性は見られない。

それに対して『ミュージック・マガジン』の一九八八年九月号では、「ドキュメントRC事件 ロックが直面した不気味なタブー」と題し、中止になった経緯、反響、余波等を硬質な文章でまとめた特集を組んでいる(図3)。興味深いのは、特集の最後を以下のように締め括っている点である。

あえて注文をつければ、清志郎の今回の歌詞はやや直接的過ぎる。いつものあぶない仕掛けや工夫、言葉の遊びがもっとあっても良かったのに、と個人的には思う。だが、レトリックなどくそくそえ、今いいたいことをいうんだ、いいたいことがいえなくて何がロックか、という姿勢は、やはりかっこいい。反原発のヒーローに祭り上げられるのは御免だと、取材を拒み続けてい

や「高まる核燃料サイクル施設への反対」「国策」に裏切られ続けた本州最北端（一九八九年一月）といったタイトルからも分かるように、国内外の原発問題を真摯な態度で論じる内容となっているのである。

原発問題への理解の深まりという点では、『ミュージック・マガジン』は『宝島』よりも優れており、真剣な態度で取り上げているといえる。しかしそれゆえに、何らかの実践法が示されるようなことはなく、誌面全体で原発が大きな盛り上がりを見せることもなかった。『ミュージック・マガジン』での原発思想の展開は、ブームにはなりえず、またそのような意図も編集部になかったと思われる。

両誌は共通するメッセージを発信しているもの、「論じる」という姿勢を貫く『ミュージックマガジン』と、読者に受け入れられやすい具体的な実践法を示し、実践の場を構築してみせた『宝島』では、読者へ与える影響が大きく異なっただけである。

七、漫画情報誌『コミックボックス』における原発思想

この時期、原発問題に関心を持つ若者は、ロック少年少女だけではなくなかった。すでに引用した『アクロス』の「原発とめよう一万人行動」のレポートでは、「マンガ研究会ふうの味な少年」⁽⁵⁵⁾の姿も観察されている。また、『宝島』においても「パンクス以外の同世代の連中にも言いたいことがある。誤解を恐れずにはつきりいってしまおう。会場に集まった若い奴らの大半が、フツウの大学生か、おたく族タイプであった」⁽⁵⁶⁾というように、反原発運動におたくが参

加している様子が捉えられている。おたくの反原発運動への連なりについては、管見の限り、先行論は存在しない。本節では、同時代に『宝島』周辺とは別の文化圏を形成していた若者たちによる反原発運動がどのようなものであったのか明らかにするため、漫画情報誌の『コミックボックス』を取り上げる。

『コミックボックス』は、ふゅーじょんぷろだくとから一九八二年九月に創刊された。新刊情報や漫画家へのインタビュー、漫画の掲載だけでなく、同人誌の紹介や情報共有にも多くのページを割いている。

一九八八年頃、『コミックボックス』においても反原発言説が盛んに取り上げられるようになる。その理由は、編集長の才谷遼個人の強い関心によるところが大きいと考えられる⁽⁵⁷⁾。才谷は編集後記において「わが自宅・電力会社闘争記」（中略）一ヶ月のうち30%約10日間、電気を止めてくれ。とゆうわけで、ランタンとランプの生活が月のうち10日あるわけだが、結構、楽しいモノだ」⁽⁵⁸⁾と電気を使わない生活を実践していることを記している。明らかに「自宅闘争」の影響を受けたと思われる表現と実践方法が示されており、「自宅闘争」が『宝島』以外にも拡大していることに注目したい。

一九八八年八月号では、七五ページに及ぶ反原発特集「まんが・危険な話」が組まれている。手塚治虫、高畑勲の原発反対のメッセージや関西電力の新聞広告に「原発見学スタイル」の漫画を描いた松本零士への疑問が呈されるなど、原発をめぐる漫画家・アニメ作家の立場を取り上げている。そのほか、原発をテーマとした漫画も複数掲載しており「漫画から反原発を考える」という漫画情報誌らしい内容が見られる。

一方で、原発で働いていた読者からの内部告発の投稿文や東京電力と関西電力の内部資料を掲載するなど、原発問題を内側から暴くような記事も掲載している。さらに『宝島』と『ミュージック・マガジン』には見られない特徴として、「反原発ニューウェーブ」との繋がりが強い点が挙げられる。「グループ・原発なしで暮らしたい」の中心的な人物として活動した主婦の小原良子の言葉や「反原発ニューウェーブ」の関連書籍、デモ集会等の情報を掲載しており、運動に連なる意志が編集方針からは感じられる。

特集号以降でも、複数の頁を用いて「原発コラム」が連載されていく。「本誌コミックボックスではこの『原発コラム』を常設にして情報交換を含む、ネットワーキングをしよう」というわけなのでよろしく。反原発、脱原発のミニコミ、同人誌、ピラ、お手紙、お待ちしています⁽³⁹⁾とあり、「原発コラム」を原発問題に関する継続的な情報共有の場にしたという意図が示されている。

そもそも、漫画やアニメを好む若者が原発問題に関心を持つきっかけは何であつたのだろうか。本稿では、この問いに結論付けるまでには至らないが、きっかけのうちのひとつとして考えられるのがスタジオジブリのアニメ映画からの影響である。一九八八年四月に『となりのトトロ』と『火垂るの墓』が同時上映されており、読者投稿欄には「戦争とか自然とか原発とか核とかマジなことを考える頭だつて持ってます。だから「ナウシカ」とか「火垂るの墓」みたいな作品に魅かれます⁽⁴⁰⁾」という投稿文や『火垂るの墓』の登場人物のイラストに「戦争なんかきらいだ。原発も。やめなきゃならない事が山ほどある」⁽⁴¹⁾と添えたハガキが掲載されている。おたくの中には、反原発に関心を持つきっかけの一つとしてスタジオジブリの

作品があり、戦争や環境破壊等と同様に原発に反対するという姿勢が見られることをここでは指摘しておきたい。『宝島』読者がロック・ミュージシャンの歌や呼びかけに応じる形で関心を持ったように、『コミックボックス』周辺の若者の中にアニメ映画を通して関心を持つ流れがあつたことは十分に考えられるだろう。趣味と接続して原発問題を考えることは、ロックを好む若者の間だけで起こっていたわけではなかつたのである。

また、別の投稿では、『宝島』周辺の展開を知つた上で「漫画と反原発」を接続させた実践方法を考案しているものがある。

最近、「CB」や「宝島」など雑誌で原発の記事や特集をやつている。ミュージシャン達が反核の歌を歌うライブや反核集会受到、でも政府の奴らは何も考えていない。このままでいいのか。こうなつたらもうコミケで署名活動をするしかない。そうコミックマーケット34を「ATOMIC コミケ」にするんだ。⁽⁴²⁾

投稿者は、『宝島』の反原発特集と反核ライブや反核集会の開催を受けて、自身の趣味である漫画と結びつけた「ATOMIC コミケ」を構想している。「ATOMIC コミケ」という名称が、反核ロックフェスティバルとして知られる「アトミック・カフェ・フェスティバル」から考えられていることは明らかであろう⁽⁴³⁾。『宝島』周辺の動きが、同世代の異なる若者の動きとして、『コミックボックス』の読者側からも捉えられていることが分かる。

『コミックボックス』の反原発関連記事に対して、読者はどう反応したのだろうか。編集部を選定や関与があることを考える必要

があるが「期待してまず。これからのCB。私も原発反対です」⁽⁴⁴⁾というように、雑誌の姿勢に期待や賛同を示す読者の熱いメッセージが多数掲載されている。このように、多くは原発を取り上げるという『コミックボックス』の姿勢を称賛し応援するに留まる。

また、「来月号より定期購読にしました。なぜしたのかというと、来月号の特集「危険な話」というのを知ったからです」⁽⁴⁵⁾というように、反原発特集を見て定期購読や購入することを決めたという投稿も複数見られる。反原発を掲げた雑誌を購入するというのもまた、読者にとっては、自らの主張を示す「自宅闘争」的な手段であるといえるかもしれない。

『コミックボックス』の誌面を見ると、漫画やアニメを好む若者の間でも、この時期、原発問題は重要な関心事となっていたことが分かる。『コミックボックス』は原発問題の情報共有の場を作ることが目指しており、漫画家のメッセージや漫画作品だけでなく、読者の意見も多く掲載している。しかし、反原発と漫画を接続させた実践の場を構築していくような動きは見られず、読者側も、一部積極的に実践方法を考えるような投稿が見られるものの、多くは反原発のメッセージを主張する雑誌の姿勢に賛同し、応援するに留まる。

八、おわりに

本稿では、『宝島』で行われた反原発の実践として「自宅闘争」と趣味との接続を挙げた上で、『ミュージック・マガジン』と『コミックボックス』を比較対象とし、同時代の反原発言説の中で『宝島』

が果たした役割を考察した。

「ロックに結びつけた反原発」「漫画に結びつけた反原発」というように、自分の趣味と関連させて、個人または仲間内で考え行動するというのが一九八〇年代の若者の方法であった。連帯の拒否と趣味との接続は、『宝島』とその読者に限ったものではなく、原発問題に関心を持つ若者において共通する態度であるといえる。しかし、ここで注意しておきたいのは、「原発とめよう一万人行動」に出現した「若者」たちが「それぞれがバラバラに自分達の好きなように」「反原発を訴えていた」⁽⁴⁶⁾とする報告にも見られるように、同じ社会問題を考えている同世代であっても、また、互いの原発問題への関心を認識していたとしても、趣味を超えた連帯が見られることはないという点である。同世代というだけでは不十分であり、同じ趣味を共有している仲間との間でなければ、原発問題を語り合うことはできない。

そうした同時代状況の中で『宝島』は「自宅闘争」という極めて個人的な手段を具体的に提示し、趣味と接続しながら反原発のメッセージを発する場を雑誌という媒体を超えて作り上げた。こうした展開は、本稿で比較対象とした『ミュージック・マガジン』と『コミックボックス』では見られないものである。一九八〇年代の若者にとつて受け入れやすく実践しやすい具体的な方法を展開してみせたことが、同時代の反原発運動における『宝島』の最大の功績なのではないだろうか。

注

1 安藤丈将は「ニューウェーブ」という運動の呼称が生まれたのは、

一九八六年四月、旧ソビエト連邦で起きたチェルノブイリ原発事故から二年後の一九八八年一・二月、二度にわたる四国電力の伊方発電所（伊方原発）の出力調整実験中止を求めめる行動（通称、高松行動）の後である。高松行動の中心的な担い手の多くは、チェルノブイリ原発事故後に原発問題に関心を持つようになった。彼女たちはそれ以前から活動していた人びとから自らを区別し、メディアにおいて「反原発「ニューウエーブ」と呼ばれていく。その後、運動は、これまででない規模の広がりを見せていく」と述べている（安藤丈将『脱原発の運動史——チェルノブイリ、福島、そしてこれから』二〇一九年、岩波書店、二頁）。また、高田昭彦の論をまとめれば、「反原発「ニューウエーブ」の特徴として、組織的ではなく個人中心の行動原理である点、中心となつたのは子供を持つ都市部の主婦等の運動経験がない女性たちであった点、歌や踊りや派手な衣装などを用いたパフォーマンス性の高い運動の形態が見られる点、食や環境など他の社会運動へと拡大した点が挙げられる（高田昭彦「反原発「ニューウエーブ」の研究」『成蹊大文学部紀要』二六号、一九九〇年）。

2 安藤丈将は「若い世代、特に一〇代の子どもたちが、脱原発の広がりの中で重要な役割を担ったことも見逃せない」としている（前掲、安藤『脱原発の運動史』九二頁）。

3 赤田祐一・ばるぼら『20世紀エディトリアル・オデッセイ 時代を創った雑誌たち』誠文堂新光社、二〇一四年、一二四頁。

4 一九七〇年代にはドラッグや精神世界を特集するカウンターカルチャー誌、本稿で扱う一九八〇年代にはニューウエーブの若者向け総合情報誌、一九九〇年代にはヘアヌードやアイドル発掘写真を載せるグラビア誌、二〇〇〇年代には若者向けビジネス誌、二〇一〇年代には

裏社会や闇ビジネスを扱うタブー情報誌へと、時代に合わせて全く異なる雑誌に変化した。

5 『宝島』が「メジャー」「マス・マガジン」と呼んで明確に対抗意識を持つていた雑誌に『ポパイ』『ホットドッグ・プレス』等の男性向け情報誌が挙げられる。『宝島』編集長の関川誠はインタビュの中で「ポパイ」に対するカウンターのなものは「雑誌としてはありません」と答えている（ばるぼら『NYLON 100%』80年代渋谷発ポップ・カルチャーの源流』アスペクト、二〇〇八年、一九七頁）。また読者も、『宝島』一九八六年一月号から六月号にかけての投稿欄でアイドルやメジャーな人物を取り上げることへの批判が巻き起こるなど、他誌にはない独自の情報や「マス・マガジン」と距離をとる態度を『宝島』に期待している。

6 篠原章『日本ロック雑誌クロニクル』太田出版、二〇〇五年、二一四頁。

7 一九八九年にアマチユア・ロックバンドが出演するコンテスト番組「イカすバンド天国」（通称・イカ天）が放送開始され人気を博すなど、バンドブームが起こる。

8 「新若者風俗分類学 ポスト・タコツボ論」『アクロス』一三巻四号、一九八六年四月、三四頁。

9 例えば、ロンドンの反核ムーヴメントを紹介する記事として「世界最大のUK「反核」フェスに、日本からもサンセットが出演予定中！」（『宝島』一九八五年五月、四〇頁）や「ポール・ウェラーも座り込み!! 反核への熱いムーヴス」（『宝島』一九八六年一月、四・六頁）が挙げられる。

10 「いま、なぜ『反原発』なのか」『アクロス』一五巻三号、一九八八

年六月、七〇・七一頁。

11 「テンションを高める全国各地の反原発行動」『宝島』一九八八年六月、一三六頁。

12 同前。

13 結秀実は「運動の質を参加人数だけではかることはできない」とした上で、「原発とめよう一万人行動」を「八〇年代反原発運動のピーク」と位置付けている（結秀実『反原発の思想史——冷戦からフクシマへ』筑摩書房、二〇一二年、二七六頁）。

14 「いとうせいこうの無機物くんとボク」『宝島』一九八八年三月、一八五頁。

15 同前。

16 「自宅闘争者の日記」2 『宝島』一九八八年五月、一八七頁。

17 「反原発 EXPRESS」『宝島』一九八八年十一月、三六頁。

18 「LAUGHINS PARADISE 小山ユウの個人的言い分」『宝島』一九八八年七月、一八一頁。

19 「自宅闘争者の日記」1 『宝島』一九八八年四月、一八七頁。

20 「全国から届いた脱原発の声！」『宝島』一九八八年十一月、三八頁。

21 前掲「いま、なぜ『反原発』なのか」七一頁。この一〇代の全員が『宝島』の読者であるとは言えないが、『宝島』で『危険な話』を繰り返し紹介していることや、「一枚のハガキが原発を止める！」という企画についても複数回取り上げていることを考慮すると、これらに参加した一〇代の内の少なくない数が『宝島』読者だったのではないかと予想できる。

22 山本昭宏「一九八〇年代の『宝島』と核の「語り易さ」『原爆文

学研究』第一号、二〇一二年、三九頁。

23 例えば、「誰よりも早く「反核・反原発」を歌った男が今、「危険な時代」に警鐘を打ち鳴らす!!」（浜田省吾ロングインタビュー）『宝島』一九八八年七月、三八頁）、「平和、反核って何だろう?」（辻仁成の楕円の地球儀 第十一回）『宝島』一九八八年一〇月、一三五頁）など。

24 「反原発 EXPRESS」『宝島』一九八八年十一月、三八頁。

25 「広告」『宝島』一九八八年八月、一九二頁。

26 「虹色プレゼント倶楽部」『宝島』一九八八年一〇月、二一〇頁。

27 「WONDERLAND ROCK FESTIVAL」『宝島』一九八八年一〇月、一五八頁。

28 前掲、篠原章『日本ロック雑誌クロニクル』一一〇・一一二頁。

29 同前、一一三頁。

30 「緊急特集 RC『COVERS』発売中止!」『宝島』一九八八年八月、六頁。

31 同前。

32 篠崎弘「ドキュメントRC事件 ロックが直面した不気味なタブー」『ミュージック・マガジン』一九八八年九月、六五頁。

33 「レターズ」『ミュージック・マガジン』一九八八年八月、二五五頁。

34 「後記」『ミュージック・マガジン』一九八八年九月、二四六頁。

35 前掲「いま、なぜ『反原発』なのか」六九頁。

36 西村茂樹「反原発運動に関する文句とささやかな提案」『宝島』一九八八年六月、一三六頁。

37 編集者の一人が読者投稿に答える形で「手塚氏、松本氏のインタビュー、まんが家の会の結成等について、編集長の意思はあまりに固く、

私には止めることができませんでした」と書いていることから推測することは可能である（今いる自分の場所で、今の自分にできることを）

『コミックボックス』一九八八年一〇月、七九頁。

38 「日々平安」『コミックボックス』一九八八年九月、二五二頁。

39 「原発コラム」『コミックボックス』一九八八年九月、八五頁。

40 「BOX club」『コミックボックス』一九八八年一〇月、一八一頁。

41 同前、一八〇頁。

42 「BOX club」『コミックボックス』一九八八年九月、一九〇頁。

43 「アトミック・カフェ・フェスティバル」は、アメリカで制作された反核をテーマとする映画『アトミック・カフェ』に影響を受けて日本で一九八四年に開始されたロックフェスティバルである。

44 「BOX club」『コミックボックス』一九八八年九月、一九〇頁。

45 同前。

46 前掲「いま、なぜ『反原発』なのか」六九頁。